

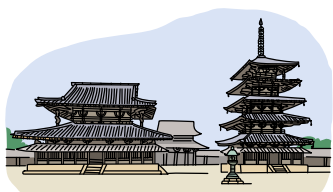
音読

短歌のリズムを感じ取りながら  
音読や暗唱をしましょう

年

名前

短歌1（奈良時代） 短歌（たんか）とは五・七・五・七・七の三十一音から成るものです。短歌は、短歌1で音読するのは、奈良時代に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。



春過ぎて 夏来にけらし 白妙の

ころもほ

ちょう

あま

かぐやま

衣干すてふ

天の香具山

（持統天皇）

じとつてんのう

いつの間にか春は過ぎた。いよいよ夏がやって来たらしい。夏になると真っ白な衣を干すといわれる天の香具山に、白い衣が干してあるのが見えると思つ。

天の原 ふりさけ見れば 春日なる

みかさ

三笠の山に 出でし月かも

（阿倍仲麻呂）

広い空をはるかに見上げると、今ちよつと、月が出ている。あの月は、ふるさとの春日の山々の一つ、三笠の山の上で見たなつかしい月と同じなのだなあ。

田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の

たかね

高嶺に 雪は降りつつ

（山部赤人）

田子の浦に出て、はるか遠くをふと見上げると、富士の高い峰には、見事に真っ白な雪が降り積もっていることよ。

東の 野にかぎろひの 立つ見えて

かへり見すれば 月かたぶきぬ （柿本人麻呂）

東の方の野は、朝日で、あかね色の光でそまっているのが見え、西の方をふり返って見ると、月がしずもつといているのが見える。

読んだ回数 ( ) で囲む	読み進め									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
( )	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

先生の評価	私の評価	よい姿勢	すらすら読む	短歌の暗唱	意味が言える
( )	( )	( )	( )	( )	( )

読み進め

よい

読み進め